編集後記

この1～2年来、高病原性鳥インフルエンザ（H5N1）が何時アウトブレイクするか喧噪される只中で、今年の4月、メキシコ発の豚インフルエンザ（H1N1）が新型と公式認定され、その対応に世界中が困惑しています。新型とはいえ、今回の豚インフルエンザは伝染性、かつ病原性において予想されたパンデミアとは大分様相が異なり、低病原性であることです。WHOも世界各国からの感染広報告を受け、6月半ばには遂に最高の警戒水準であるphase 6への突入を宣言しているが、何百万人、何千万人もの死亡が予測されたパンデミアとのギャップに、国も県も、そして1番医療現場がその対応・対策のあり方に戸惑い禁じ得ない状況なのです。折しも厚労省の現役技官・木村盛世氏が「厚生労働省崩壊」という著作で深刻な厚労省内部の問題を指摘しているが、医療現場を殆ど知らない医系官僚が為す医療政策の珍奇さを、今回の一連の新型インフルエンザ騒動の中にも垣間見る思いがします。国からの朝令暮改の施策に振り回されながら、第一線の現場では日々の悪戦苦闘が続いているのです。

その様な時局の中で企画された今回のマスコミとの懇談会は、福祉保健部より感染症担当官である糸数公先生をお招きして、県の新型インフルエンザへの認識と対策・指針について話をして頂いた後、意見交換が行われました。丁度、兵庫、大阪を中心とした関西方面で新型インフルエンザの集団発生がみられた時期と重なり、国の大々的な水際作戦が取り払われ、国内の拡大防止へ路線変更が為された時期でもあったが、島嶼県である沖縄では依然として水際作戦に準じた対応策を展開するという微妙な端境となり、為された論議も今ひとつ焦点が定まらない印象でありました。

宮城会長からは、第1回都道府県医師会長協議会の報告があります。2009年度の予算を決する直前の緊迫した状況下で、日医の方針をどのように国策に盛り込んでいくかが議論の中心であるが、医師確保の問題、救急医療のあり方、有床診療所の活用、開放病床の運用、介護報酬の問題等々、重要な案件が討議されています。また、勤務医の入会しやすい日医にするための模索は、懸案である「医療安全調査委員会設置法案」の是非と共に、開業医と勤務医が大同団結できるかどうか、大きな試金石の一つといえましょう。

6月14日に行われた県医学会総会は、一般演題が126と相変わらずの盛況で、研修医企画ミニシンポジウムも斬新な試みでした。また聖路加国際病院長・福井次矢先生をお招きしての特別講演は、医療の質の評価として、従来から言われている構造structure、過程process、結果outcomeの3要素の中で、ともすれば結果のみが重要視されがちであるが、評価自体が難しい結果よりも、過程の評価であるQuality Indicator（QI）の活用を説いています。聖路加ではすでに100にも上るQIを作成し、実践しているとのことであるが、極めて実効性の高い活動となっているようです。

恒例の「緑陰随筆」は何と22編の投稿を頂きました。この一事においても、会員諸氏の本誌への愛着を強く感じる次第で、広報誌編集部としても感謝に堪えません。一編、一編が味わい深い文章であり、一気に掲載したいところでありますが、編集の都合上、来月9月号との分割掲載になることを、平にご容赦ください。

今月はその他にも、稲冨洋明先生の旭日小綬章受章祝賀会の報告や大城清県立北部病院院長就任インタビュー等の喜ばしい記事や、仁井田りち先生の日医会館で開かれた女性医師支援センター・シンポジウムの大事な報告があります。

学術的な記事は、みなみしまクリニック 島袋毅先生の「糖尿病のABCD」に加え、県立南部医療センター・こども医療センターからの3編の投稿となりました。神里尚美先生の「パーキンソン病治療の新しい展開」、大城一郁先生の「外来で血小板減少の患者をみたとき…」、そして久貝忠男先生の「末期重症心不全患者に対する心臓移植に代わる治療法の展望」であるが、何れも要領よくまとめられ、明日からの実践的な臨床の知恵として役立つ素晴らしい仕上がりです。

盛夏の候、本誌を一服の涼風としてお慰みください。

広報担当理事　當銘 正彦